

—若手技術者のコーナー—

漁村への思い

1. はじめに

土木系の大学院を修了して、昨年4月に水産庁に入庁した。私は旅行が好きで、学生の頃から国内海外問わず様々なところへ旅行に行き、いろいろな街・集落を見て歩いた。

その結果、日本の素晴らしさ、とりわけ地方部の素晴らしさを再認識した。海外旅行ももちろん楽しいのだが、その街の背景にまでなかなか思いをはせられない。同じ国であれば、どの街もどの集落も同じように見えてしまうことも多い。

しかし、私にとって日本は違う。どの街、集落も独自の文化や歴史を有し、それを有形無形問わず受け継いできており、それらの差異を感じ取れる。この差異を大事にしたい。そのためには、街、集落を維持しなければならない。それも、第一次産業に代表されるような、地域に根差した産業をもって維持できれば、なおそれぞれの街、集落にとって意味があるだろう。地域が誇れる第一次産業を、私の専門である土木を通して振興したい。そして、地域の活気を取り戻し、その活気を持続可能なものになりたい。そうした思いがあり、水産庁に入庁した。



旅行で行った八戸漁港の朝市の様子

2. 業務について

昨年4月に入庁し、計画課利用調整班に配属された。利用調整班での業務の一つに、「漁港機能増進事業」の計画及び実施がある。当事業は、事業期間を原則単年度としており、機動的に事業を実施でき

るようになっている。そのため事業規模は小さいのだが、その分、漁業者の方々の日常的な苦労や不便が計画書から読み取れる。例えば、岸壁の屋根の整備。直射日光の下で荷さばき作業を行う必要がなくなるとともに、水産物の鮮度低下を防ぎ魚価の下落を抑えることができる。また、船揚場の滑り材の整備。漁船を上架する際、滑り材が設置されていない箇所では、摩擦抵抗が大きく多大な労力を要する。滑り材があれば、抵抗が減り省力化を図ることができる。

こうした小さなことの積み重ねが、少しでも就労環境の改善等につながり、漁村に留まろう、漁業を少しでも長く続けようと思う方の増加につながってほしいと思いながら、日々業務に携わっている。



職場にて

3. おわりに～今後の抱負～

入庁前は、地域を活気づけたいという思いばかりが先行しており、そのために自分が何をできるのか、国が何をできるのかについては、ぼんやりと考えていただけであった。しかし入庁してからは、ささやかながらも漁村の維持・発展に貢献していこうという思いを持ちながら、具体的に自らの業務を遂行することができている。これからもこの思いを忘れることなく水産庁の業務に携わるとともに、具体的な施策に移していけるよう頑張っていきたい。

(水産庁 計画課 平田 将大)